

# 人間について

——中国哲学史研究者として——

佐藤 一郎

人間とは何ものかを考えるとき、中国哲学史という制約を有効に利用するために、人間をあらわす漢字、「人」とは何であるのかから出発する方法を採用することにした。中国の文字「人」は、あきらかに人間の身体の象形である。だがこの象形文字「人」は人間の側面像であって、決して正面像ではない。「大」字は、ふとった、あるいは威風堂々たる人間の正面像である。又、「立」字は、大地に足をひろげて堂々と立つ人間を正面から画いている。だが我々人間をあらわす「人」、部首として人間一般を示す「亻」（にんべん）「亠」（ひとがしら）という附号など、これらの「人」は既に述べたように側面像である。その理由について考えることから始めたい。

近年中国でおこった文化大革命、それにつづいた批林批孔（林彪と孔子に対する批判）は新聞紙上でも若干の解説付で紹介され

ているので、おおよそのところは御存知と思うが、孔子批判の中で今回の問題につながるものがあるので、ふれることにしたい。それは孔子が対象としている「人」とは、孔子の仲間、すなわち支配階級であって、「民」とは被支配階級で「人」ではなく、彼の思想は「人間一般」のためのものでないという説である。この解釈は論語について帰納的に研究され、相当うなずける点をもっている。又、アイヌの人々の言語では、アイヌとは人間で、仲間のことであるが、シャモはこれに対する「となりのひと」を指すと言うことである。特に階級的観点をいれなくても、ある思想的発達段階の言語では人間とは仲間であり、仲間でないものは人間でなかつたことは充分に考えられる。

要するに私は「人」とは自分の横にならんでいる人間のことで、仲間のことであったと考えている。向かいあう人間ではないから

側面像になっているのである。「比」字など、正に人の側面像が二つならんでいるものである。

以上のような「人」の觀念をもつた論語において、人間は「天」より自立し、相対的自由をもっていることが認められる。これは春秋時代より戦国時代初期において、すぐれた貴族達(君子)によつて到達されたもので、天の人格神の色彩は薄く、天道と人道という二重の道理・規範を肯定し、天命は運命として甘受するという構造をもっていた。これは論語における孔子の思想に見えるのみならず、その後継者たる孟子につながり、更に戦国時代末期の荀子、あるいは漢代にいたつて、「天」の觀念の変化に伴つていろいろな方向に展開する。

ここで私は思想的に重要な諸概念をとりあげて、中国における人間概念をいろいろな角度から研究することになる。しかし本日的时间的制約もあるので、重要と考えるもの「信」と「仁」との二つをとりあげて、問題の本質に端的にせまることにした。

最初、私は論語において

「人にして信なくんば其の可なるを知らざるなり」

(為政第二)

とある「信」が仲間である人間を結びつけるものではないかと考えた。「信」という文字は「人と」とよりなり、言葉と行為がたがわないうことを原義としている。このような徳目が仲間である

「人」と「人」との間にふさわしいと考えられるが、実は「信」は上下関係、君主と臣下・人民との間の徳目としてあらわれている。それは既に春秋左氏伝において鄭の子産が君主と人民との間の盟誓を以て信としている(昭公十六年)し、論語においても顔淵第十二の子貢問政章において、「子貢、政を問ふ。子曰はく、食を足らし、兵を足らし、民、之を信ずと。子貢曰はく、必ず已むことを得ずして去らば、斯の三者に於いて、何をか先にせんと。曰はく、兵を去らんと。子貢曰はく、必ず已むことを得ずして去らば、斯の二者に於いて何をか先にせんと。曰はく、食を去らんと。古より皆死有り。民は信無くんば立たずと」。

左伝や論語における此のような傾向は同義の文字二字をならべた連文(又は連語)という造語法では、忠信・誠信として孟子・荀子・墨子などにあらわれ、この場合は君主への「まこと」であった。老子にも「夫れ礼は忠信の薄き……」として、社会秩序(礼)の前段階としてあらわしている。更に熟語で考案すると、忠信之士・信人(墨子) 信賞必罰(韓非子) というように強い君主権を主張する学説で「信」が重要な徳となつてることが認められる。上下の人間関係の徳であつたのだ。

中国の数千年の歴史において漢より清朝までの諸王朝の正統的イデオロギーは儒教であつた。この儒教における最高の徳は「仁」であることは言うまでもない。論語以前において「仁」は意味もはっきりしない言葉で、春秋時代の君子を美化する貧しい用例一、

二あるのみである。論語の用例などから帰納すると、自らに対してはこらえる、他人に対しては親しむ（或いはみとめゆるす）と言う意味で、このような字義は、漢代においていよいよ強められ、仁とは「親なり」（説文）、「相人偶（耦）」（中庸注）として、「爾と我と親密する」（説文段注、仁字について）ことと理解されている。しかもこの中庸注は中庸の「仁とは人なり」の人について「相人耦」の人と言っているのである。この人は大勢の人ではなく、君と僕との両者の間の「仲間」を意味する「人」ということになる。すなわち、「人」と「仁」は発音も近く意味も連続したものである。附言すると説文・中庸注などは字源を論じつつ、同時に漢代においてもっとも論理的に妥当するもの、すなわち現実を反映したのも、もっとも漢代的なもの、中国的な人間関係を表現しているのである。

天からは自立し相対的自由をもつ人間、すなわち儒者、それは説文において、「仁とは親なり」の直前の箇所において、「人、天地之性、最貴者也」と述べられている。まさに万物の靈長ということである。自立し自由をもつがゆえに最も貴いが、この「人」は血縁・地縁・学閥などという個人的つながりの中の存在であることになる。後世、君子と小人との党争とされている後漢の党錮、唐の清流、宋の党籍、明の東林といったもの、更にそれについて論じ、弁護した唐宋の名士の朋党論など、党派の問題について見

ると、いずれも組織のない個人的つながりによる党派の争いであり、天子の側近者に政権が掌握されていた中国的専制体制の産物と言えるところに、中国的な「人」の存在の原点に起因することとも指摘されうるのである。

左伝よりの引例で指摘した「信」の観念は「盟誓」すなわち契約による「信」であった。春秋には君主に対し人民が組織として対立し自立していたとも言えるが、既に指摘したように、「信」は墨子、韓非子などという君主権強化、専制君主制確立という方向のもとでは、君主への「まこと」へつよく展開し、君主からは信賞するという上下関係になっている。秦漢以降の皇帝は、まさに天の代理者天子として出現し、個々の人民に直接にむすびつこうとしている。相対的自由をもつ人間の行動形態、朋党の否定は当然まず墨子（尚同論）にはじまり漢代より特に否定されることになる。呪術信仰が漢代において強く出現するのは、本来呪術信仰をもっていた庶民が、天子を神秘的な存在（呪術者）としたことに起因すると言えることになる。

そもそも天からの自立、相対的自由をえたのは春秋の進歩的君子であり、孔子であり、儒家であった。他方、伝統的な庶民の信仰は全く呪術的なもので、自然に没入し人間の自立はなかったと言える。しかし古代の原始的宗教思想を基盤に展開した老子莊子など道家では天の呪術性をのりこえて人間を自然存在に近い天道の中に埋没させたが、これが魏晉南北朝で流行していた。

この段階で仏教の渡来が始まる。前漢末期から後漢、更に魏晉にかけて仏教が呪術的なものであったこと、それによって布教が拡大したことは言うまでもない。だが人々の心を真にとらえたのは輪廻転生因果応報説であった。万物の霊長である人間がなぜに他の存在に輪廻するのの疑問はついに強く出ていないのは、既に人民の自立がなかった、失われていた、抑圧されていたからである。一方、現体制をささえる働きを、輪廻転生因果応報説はしたわけて、南北朝の范縝が花片の風のままに散ることにたとえて、偶然論で因果応報と現体制肯定を攻撃したのはその好い例である。范縝は道家思想の立場、すなわち天の呪術性否定という原始唯物論の立場から攻撃したわけで、当時の儒教徒は最も過激な人でも相対的に天を認める以上、天子より人民にいたる階級秩序を肯定せざるをえなかったし、又「万物の霊長」たる人間とは、現体制の肯定の上に生活を享樂する「人」であると考えれば輪廻と矛盾しなかったのである。勿論、仏教教団に対する社会秩序、国家財政上などからの攻撃は儒者から出されているが、それは別の問題である。

以上、簡単ながら中国の「人」の觀念が「仁」を最高の徳とするように「仲間」の意識に支配されていたのでないかということ、それが思想史や政治史、更に比較思想の対象たる仏教の輸入の問題とどのようにからんだかについて粗雑に論述した次第である。

(1) 范縝 南朝齊・梁の間の人生没年不明。この話は齊の竟陵王蕭子良との対談に由来する。

(2) 人間を万物中の最高存在とする表現は、漢代の文献に見られる。

〔説文〕人、天地之性、最貴者也。〔白虎通〕人者天之貴物也。尚、書經の泰誓に「惟人万物之靈」とあるがこれは偽書である。

(さとう・いちろう、中国哲学、北海道大学教授)